

入子話

泉鏡花作

全一章

色を紅に染めた錦木と、龍膽、女郎花などを、
合せて床の間に活た。掛ものは、紅葉先生の「二
三里の妹が行くや露の中」と言ふのである。壁
はぐわさ／＼だけれども、此の風情は可懐しい。茶
心があるとお客をして、一寸お目に掛けたいくらゐ
である。

處で、（九月下旬）籠にさした此の秋の色だが、
何も草の花の取會せに心得がある次第ではない。麴
町通りの花政の店に、きれいだと思ふのを、幼稚に
引つこぬいて来て、其のまゝ突込んだのに過ぎない
けれども、さて恚う視めると煙草も甘い。――
尤も活け方に、術も見處もあるのではない。山の枝
も、野の草も、露霧を其のまゝに押つくねたばかり
である。

何しろ、流儀に心得のない事は、つい、此の一組の前に、床に置いた花の中に、檜の枝が取添へてあつた。――檜のそめ葉だと思つて居た。

今度のに活けかへる前日の朝、
「もう取かへなくつちや、大分ひどく成りましたね。」
と、家内が艶布巾を掛けて居ると
ものは布巾でも、まことにしとやかでない掃除の響きで、枝からボンと飛出して、コトンと轉がつたものがある。おや、と見ると、莢を脱けた一顆の團栗であつた。

振返つて、
「悪戯をしましたね、」
と、私に言ふから、
「馬鹿な、月末だよ。」
と、氣のない顔をしたが、しかし之は嬉しかった。お互に夏は暑いと云ふうちにも、今年の暑さには大弱りに弱つた處へ、此の木の實は、板屋を走る露の音より、涼しい秋の音信で、樹のある地所がころがり込んだやうなものだと、趣暑の旅行の出来なかつた負惜みを言つて、其のまゝ花籠の下へ置いたつけ。――
何處から飛出したらうに、何の不思議もない。葉隠れに成つて居たのが檜の枝から撥たので、椎の實は椎の樹さ、團栗は檜の樹と説明をすると、家内は成

程と合點した。が、餘り柔順に合點したから、あとで少々氣の毒に成つた。果して櫛の實が知らん？
實は餘り確でないから、此の位な學問はいろは引の字引で出来る。内證で繰つて見ると、正に違つた。太郎兵衛は太郎兵衛で、團栗の實は、矢張り團栗の樹の、實なのである。

申すまでもない、櫛だと思つて居たのは團栗の枝であつた、と言ふ覺束ない觀賞家だから、活け方に心得のあるのではないが、錦木の紅、龍膽の紫も、見れば其のまゝ美しい。

女郎花さへ取添へて――此の露、此の霧、此の色を寄せるには、凡そどれだけの山、どれだけの野を要するであらうか。買つた銀貨の寸法ぐらゐでは、殆ど、想像にも及ばないと言つても可い。

尤も向島の百花園へ行けば、何時でも揃つて居る。しかも今頃は盛であらう――一面の秋の錦を、夕顔棚を諸侯にしたやうな、眞赤な錦冬瓜の搦んだ棚の下の床几で眺めて、首尾がいゝと、晝の月に雁

の渡るのなども見えようけれど、其と是とは別である。

錦木は、まさか陸奥の片山里まで探すにも及ぶまいが、花屋が賣るのに――今度の龍膽は日光のださうだが、前に活けたのは、軽井澤あたりで仕入れたものださうで。此を思ふと、瑠璃の爽さは霜のやうである。

女郎花は玉川べりにまだいくらかも咲くと、聞くが、もう桔梗と成ると、農家の背戸のものずきか、別荘構の庭でないと見られない、それも稀で、二本三本、唯あちこちに過ぎない。野に咲いたのは殆ど面影もないと言ふ。

その筈である。以前は、すこし出れば堤にも垣根にも咲いた嫁菜の花。――赤のまんま――紅蓼が、近頃では清水谷の公園の奥を探してもまるで見えぬ。嫁菜、紅蓼、此の中へ露草の眞青なのが交つて、秋空に、晝も白露に咲いた風情は、またなく可憐な、ゆかしいものであるが、散策も一夜泊り

と名のつく軽い旅行をするくらゐでなければ見られ
さうにも思はれぬ。

彼岸に、雑司ヶ谷へ参詣をした。池袋

の停車場から、墓地へ行くまでの間に、嫁菜一葉、
蓼一莖もなかつたのはもの悲しい。二三年前までは、
まだ横道へ掛ると、畑の南瓜どのが、道端へ、頬被
もしなければ、「今日は」とも言はないで、の
こんと顔を出して居る。ござるわいと、
前後をニはして、悪戯にステツキを取直すのだが、
何の遺恨もあるのぢやあないから、其處で氣を替へ
て、トント掌で敲いて通る。などと言ふ事
もあつたけれど、今では家がひし／＼と建續いて、
下水は溢れても、植ゑたのでないと草も生えない。

籬の竹や、雑樹に搦んで咲き残つた朝顔の紅色な
のさへ、珍しいほどであるから、僅ばかりの小菜の
畦も、茄子の振も面白い。私は一軒、鶏頭を植ゑた
背戸を差し覗いて、薄曇の日の影にゐんだ。

今更言ふにも及ぶまい。既に、今年の春の頃、何

かの随筆を見て居ると、關口の瀧、駒塚橋、時雨塚から山吹の里の事が出て居たので、急に可憐い思ひがして、友だちを一人誘つて、蓑處か、外套も着ないで、日向を野面に出掛けたが、江戸川の上流は灰汁を流して、山吹の里は何處へやら。狭い町は石灰がらで充滿で、早稲田へ廻つて歸るまでに、其の濁つた川沿の何處かの石垣に、うつちやつたやうな山吹が、ほんの一枝、乾びてひよろ／＼とあつたばかり、砂ほこりに、のぼせて歩行いて、小雨にも逢はなかつた。

しと／＼と降りくらす雨の日に、傘をさしてふらりと出て、餘所の垣根の、あの山吹を見るのは、合方に、紅梅と違つて琴のないだけ、まことに趣のあるものだけけれど、紫陽花はまだ時々見掛ける。――崖にも、背戸にも山吹はさつばりない。時たま大構の邸の庭から、堀越の梢のうかがはれる事はあるが、立つて覗かうとすると、そんな處に限つて、外圍が高いから、勢ひ爪立つて、のび上る。と、鼻の下はのびながら、ものがものだけに、山吹色と言ふのを口惜しがつて、齒をくひしばつてぢだんだ

を踏むやうだから此奴は不可い。

尤も此

は此の番町界限の事を言ふのである。

前に向島の百花園の事を言つた　　代は何代

も代つたらうが、新梅屋敷と稱して此園を開いた鞠

塙と言ふのは（あの和尚）　などゝ稱へて、よく、

京傳、三馬の作に出る。下町連には人氣があつたが、

山の手の武左には向かない。園の水に水鶏が鳴くと

言つて、風人の集まつた事があるが、やがて、それ

は和尚が蓮池の中へ忍んで、よしあしの蔭で火吹竹

を吹いたと知れて、もの笑ひに成つたなどゝ書いた

のがある。客をもてなすため、半夜、池の中に跣む

心づかひは、おなじ慾にした處で、一寸スヱツチを

捻つて、煽風域を動かすやうなものではなからう。

　　お茶きこしめせ梅干も侯ぞ　　百花園

の秋草は全くいゝ。水上さん、万太郎さんなどゝ一

所に、淺草から、あれへ廻つたのも、もう三四年前

に成る。しばらくものまぎれに不沙汰をして居るが、

毎年花見には出ないでも、彼處だけは缺かさず出向

いた。

私には、第一忘れられない思ひ出がある。一
所に來な。一で、錢湯のお供かと思ふと、其の日
は、先生が百花園へおつれ下すつた。紅葉先生の玄
關に居た時の事である。不斷氣早でおいでなすつた
んだから、足袋も穿かないで、木戸へ駈縋つて、其
まゝおともをしたのであつたが、芙蓉の雲へ入つた
やうな氣で、萩桔梗の中の、先生の姿に見惚れなが
ら、園をめぐつた。人ごみを避けた靜かな椅子に休
まれた。紫苑の影も可懐い。一其處に
あるのが確か壽星梅と言ふんだ。札を見な一
此れが名ぶつだよ。一梅干でお茶を相伴。小さい
銀貨のお茶代で、それから土手を歩いて、吾妻橋
を渡つた。仲見世前を過ぎた處で、たし
か講釋場を向う斜に見たあたりだつたと思ふ。ふと、
餘所の軒で、雨宿りをするやうな様子で、立つて、
空を見ながら、意氣な懷手をなすつたが、「乗ら
う、乗らう。」と、急に又其の時分は
鐵道馬車で。

上野で下りると、池の端へ廻つて、氷月と言ふ、
しる粉屋の張出しの方へお入んなすつた。鹽飴が一

つ、小倉が二つ。先生は、前の鹽餡の一
つだけで。「食べな。」で、私はおかはりの分
とゝもに、三つ頂戴で、けろりとして居た。

後に、奥さんから聞いたのであるが「牛肉を驕
つて遣らうと思つて、淺草で考へたが、懷中へあた
ると些と足りなかつたよ。」との事である。――

それから仲通りへかゝる處で、二人乗が牛込まで、
其の頃だから十二錢、即ち一貫二百である。何と、
此の様子が見てもらひたい、と私は小さくなりなが
ら心では大いに威張つた。――どん／＼を渡つ
て、車が柿の木坂のだら／＼へ掛つた時である。折
から人通りが途絶えると「二人のりに、そんな乗
方をしちや不可い、兩方が窮屈だ。お前も、追つて
は友だちに誘はれゝば、安もの買にも合乗で行くだ
らう。恚う遣るんだ。」斜に腰をずらすと易々と
成つた。先生は、通の獅子寺（いま文明館）へ
大弓に――私はいそ／＼と横寺町へ歸つた、其
のおぼえがある。丁ど、先生が「三人
妻」の頃と思ふ。

鹽しほ餡あんに小倉をくらを二膳ぜん。おしる粉こ三杯ばいは、と生意氣なまいきに、
今いまでは一驚きやうを喫きつするのだけれど、甘いあまものに掛かけて
はなか／＼そんな事ことではない。

横寺町よこでらまちで、お彼岸ひがんにお萩はぎが出来できた。―― 故柳こやなが

川春葉はしゆんえがが来て玄關げんくわんに加くははつた頃ころで、折をりふし小栗をくりも遊あそ
びに来て居ゐた。其處そこへ奥おくさんの綺麗きれいなお手際てぎはで、つ
ぶし餡あんのが三つゝ―― ころに、われ／＼へ下くださ
れの分ぶんは、お手加減てかげんがあつて、萩はぎの餅もちがづゝと大き
い。柳川やながはは酒さけに於おいては、後年こうねん相撲取すまふとりの谷たにの音おと、劍山つむぎさん
なんどゝ井鉢どんぶりばちで渡り合あふほどの下地したちがあるし、小栗をくり
と来ては、最もう其頃そのころからお花見酒はなみざけのちび／＼上戸じやうこと
言いふ曲くせものなんだから、二人ふたりとも食たべ切れきないで、
速すみかに陣ぢんを引ひいた。

黒地くろぢの友染いづせんのお羽織はおりに、紅あかい襷たすきがけの奥おくさんが、
おかはりをなさいとある、お聲こゑがゝりに、何なんと拙者せつしや
はもつ立尻たてじりで、木皿こさらを出だして、此これへ二つ。――
其その大おほきいのを前後ぜんご七つと、もの凄すこく頂戴ちやうだいして、而しか
て自若じやくとしてまだ足りたりない。さすがに此これは話柄わへいに成な
つた。のちに、割前わりまへで、その時分じぶんには、怪けしからん、

小栗などが酒を教へて、お萩の手際でぐツと遣れな
どと言つた。

今でも、芝へ御年頭の折などは、奥さんがお銚子
を下さりながら、「おかさねなさい——お萩
はいかゞ。」と微笑んでお言葉がある。

いや、萩の餅そのものよりもおあんばいが好か
つたのであらう、何しろ甘かつた。——世帯帯
を持つたはじめての秋の彼岸に、さあ、本懐は此の
時、と其の時の倍掛けらるゝ、両手に一つ漸と据る
ほどの大きさなのを、注文によつて、家内がクスノ
遣りながら拵へたが、頬張る鱈の鮨ではないが、
此は見たばかりで、びどく参つた。然うだらう、ぼ
た餅の大杯。

つけて言ふのは憚るけれど、紅葉先生も、少年の
時の希望と言ふのが、志を得たらば、腹一杯、存分
に栗のきんとんを食べようと言ふのだつたさうであ
る。

春陽堂發刊の新作十二番の第一番

「此ぬし」が出来た時、此のお作は、いつも先生

の十日に一石、三日に一水たるに似ず。はりかへ時
分で有りあはせた障子紙に、風の捲くが如き勢ひを
以て、三日半日に稿が成つたと言ふ一卷である。が、
其の稿料が束に成つて入つた時、立處に一枚を引剥
がして――まだ書生も女中も居ない――御
自分で、魚がしの寄せもの屋から買つておいでなす
つたが、重箱の片端へ、くの字に箸をつけただけで、
「澤山に成つたぜ。」と言ふお話であつた。

まだお萩について、お話がある。甘味の事ゆゑ、
喧嘩でもなければ、無論惚氣では決してないから、
お聞きに成る方で御安心を願ひたい。

此の夏、納涼臺で聞いたのだが、私のすぐ近所に、
玉川あたり出身の齒科のお醫師、白井泰治氏があつ
て、其の話に
あゝの邊では霜月に萩の
餅を拵へる。
尤も此月は、亥の子の餅と
言ふのが、むかしの月行事で。古風な謎々に――
石畳と掛けて――霜月の餅と解く――心
はえ――みにくひ、ねにくひ――とさへ言
ふのだが、玉川邊のは、冬至の日に拵へるのださう

である。

で、夜ふけてから、農家が、此を、持々の大根畑
の眞ん中へ置いて来る。と蛙が出て、右

の牡丹餅をえつちらこと背負つて、こらさ、こらさ
と立つて歩行出す。――おもしろい、をかした

形を、あれ、見なまし、一寸御覽よ、見やしやんせ、
などと言つて、畑の大根が残らず眞白な顛を出す。

――こゝに於て、大根は冬至の夜から、土を抽
いて、白根を顯すのださうである。

信州の山奥に、埴生の小屋の婆さんが、一夜の中
に、床下から根だを破つて生え伸びる筈の鋭い勢ひ
に、背中から胸を貫かれたと言ふ傳説があるのと一
般、冬至ごろの大根の速かに生伸びるのを譬へたもの
であらうと思ふ。實際、風のない寂然した夜半に、
ざわ／＼と音がして伸びると言ふ。

いつか、伊勢路を旅した時、二見から鳥羽へ。

――此の街道俵で掛ると、霜月小春の午さがり
に、左右の畠の大根が、人に聞いて見たいはど、一

本づゝ、皆一尺あまり、正しく眞白に土を抽いて、
今にも脱け出しさうにまつすぐに立つて居た。其處
へ色白な、大柄な婦の、笠着て、脚絆を穿いた、小
股のすんなりとしたものが、片手に鎌、片手に澆
刺とした鯰の大きなのを、影さへ見せて提げたのが、
暇を一人、スツと來るのに行逢つた。――畦には
嫁菜、錦蓼、露草の花が、霜をおしろいの如くに暖
かく溶きつゝ咲残つた。湊の風が吹いた時、一種神
祕の感にさへ打たれるのである。

玉川の話を書いて居ると、鳥羽の大根は反對に皆
男で、どれも鼻が伸び、口がだらけて、眦が垂れて、
髯の萎えた状があり／＼見えたらうと、今にして思
ふとをかしい。

彼處に、玉川べりに桔梗の殆どない事も、白井氏
に聞いたのである。が、さすがに、薄、女郎花、我
亦紅のしげると言ふのに、武藏野の露の流れも俚ば
れる。薄根に、「妙なものが生えますが、あれは
何でせう。蕨が化けたやうな、うす紅い、花だか、
穂だか分らないものですが。」――「いや其で

すよ。」と、私は納涼臺を馬乗りに乗出した。

学校の試験の時の、カンニングとか言ふものとは少しばかり譯が違ふ。もの知りの一枚札が不思議に富くじに當つたのである。「まどろすが横銜へにした煙管の雁首似て居ませう。(南蠻ぎせる、)一名を、(おもひ草)と言ふ珍品です。」と言つて、私は巻煙草を脂下つた。

花屋が一度、――旦那方は論語よみの論語知らずだ。口ぢやあ尾花々々と言つて、薄は知つても御存じあるめえ。尾花と言ふのは此の事だよ。」と言つて、此の南蠻ぎせるが根に生えた薄を、恭しく見せた事がある。「めつたに無えてね。」

めつたになくもなからうし、恭しくはせずともだが、一寸珍品には違ひない。薄は雲のやうに、さらに見ても、南蠻煙管の寄生したのは、花屋の其時のきり見た事がないよし、また納涼臺で話すと、お醫師は驚いて玉川べりの薄根には、春のつくしほど一面に生えて居る。今度お目に掛けませうと、言ふ約束で。何でも、向原邊の出張所へ行

きなすつた歸途に、其のおもひ草を、成る程一束。

「一輪ざしに束にして」「ト類杖で見た處が、はゝはゝゝ、ジャガタラ島の助六の觀がある。

水上さんに話したら、「内の庭でも二三本見たよ、」と言はるゝ。「一たゞし青山南町の借屋ではない。白金の本邸の庭ださうだから、以て如何となす、威張れやしない。とに角、此の草の、敷いたやうにあるのは珍らしい。茗荷畑へ一面に生えた事もあると言ふが、それは唯一秋で消えた。」「いつも盛なのは、やつぱり、薄尾花が下だと聞く。

花屋と言へば、苗賣が、たしか（スターフロックス、）と言ふ西洋の石竹の様な、紅だの、絞だの、キラ／＼と綺麗な花を、なまつて、（キタクロス、）で、北海道の名産は面白い。これは可いが、おなじ花の莖ばかりを摘んだのに、アスパラガスの葉を添へて、口の小さな罫に詰めて、それ、水に漬ると此通り、三日の内に満開だ、と喚いて、慈姑と茗荷の根をこつたに、夜店で賣つて居た、いか

さま屋がある。一根三錢だとか言ふ。買ふこと／＼、
兄哥輩はともあれだが、結綿の娘が友染の前垂に包
んだのは可憐しかった。

話も入子がこんがらかつたが　ー　さて、見る
と　床の間の花はうつくしい、錦木の鮮紅
には、葉のなかに淡紅の石榴の粒のやうな實さへあ
つて、一づゝ露含んで居る。一枝といへばそれまで
だけれど、五坪や十坪の庭では、散り來る葉さへ留
まるまい。　ー

ー　其の覺がある。　私の背戸は二坪

にも足りなくて、こゝへ卯の花の枝をさし芽にした。
此の花は、町の中では、山吹よりはもつと稀で。

ある年、箱根の青葉の頃、早川で瀬を流す、
白い森のやうな其の姿に、成程、雪だの、月にまが
ふのと、人の言ふのは此の事よ、とはじめて知つた。
温泉宿の筧にさした眞白な枝にも、此のためには、
時鳥も、河鹿も、したひ寄つて鳴くだらうと頷いた
ほどである。

前に住つた土手三番町の庭には、珍しく、然も八重咲きの卯木があつた。七十いくつになる、屋敷の媪さんが、さしあひくらず腰を屈めて、座敷をなめるやうに庭へ通つて、「また卯の花を取りにな、あんた

薬に欲いと頼まれてな、あんた。」

いや、此には大いに弱らせられた。何の薬だか、つい忘れたが、しかし名木に相違ない。引越す時、一枝持つて来てこゝへ植ゑた。尤もことわつて持つて来たから、媪さんの呪詛はないのだけれど、葉ばかり茂つて、蕾も見せない。去年、十年目で、はじめて、しかも木戸を越した高い枝の、日の當る處だけ、ぽつちりと、袂にうけた春の雪ほどに咲いたのである。

葉にくろい斑があるのを、誰かゞ（蝙蝠安）

と綽名した、悪蕘らしい水引草さへ、日かげではひよろりとする。少しばかりの萩が、いつ

もより朝露を鏤めて、ふつさりと玉に花をつけたと思へば、大輪の鴨跖草の、青と、白と、覆輪とあつたのが、其の下に成つて、白いのばかりソツト咲く。浅葱、藍の朝顔の、輪の小さく成つたは風情だけ

ど、亂れたつるの下伏に、晝間も鳴いて居る蟋蟀さへ、此の狭い庭には氣の毒らしい。(指環も給金もない細君には 御同様が、もしあれば、御同様に、内證の事だが) よく居てくれると、嬉しがつて可からう。

處で、今年は土用の頃から、怪しからぬ、高調子を上げる蟲がある。はじめて聞いた。勿論、水上さんが一昨年、三田に居なすつた頃、其の頃から、あのあたりの原では、滿洲蟋蟀と言ふのが鳴く、大きな聲だ、と言はれたのを聞いて居たから、あゝ其だ、と思つて居た。八千代さんに聞くと、澁谷でも鳴くさうで。高い音である。處が、此の頃の三重吉さんの(赤い鳥)を見ると、アマツムシと言ふ珍しい蟲が、近年、東京の山の手に、櫻の枝などで高い聲で鳴きはじめた。緑色の蟲だが、何處から來たか、どうして出來たのか、その筋道はまだ學問の上にも分つて居ない。今鳴くのは、しかも東京ばかりだと書いてある。リイリイと鳴くのが、すると其のアアマツムシと言ふのであらうも知れない。此蟲は、しかしちと騒々しい。リイリイリイ、張上げた

甲かんだかな一本調子いっほんてうしで、のべつに續つづけるのが聞きいて居ゐると逆のぼ上のぼせさうである。

汽笛きてきをピーと、凄すさまじい金切聲かなきりこゑを立て、此處等こゝらへ來くる羅宇屋らうやがある。餘あまり響ひびきが激はげしいので、耳みみがグワンと鳴なつて、癩かんがジリ／＼と來くる。氣きの弱よわい小兒こは蟲むしを起おこす。敢あへて他ひとの商賣しやうばいに沙汰さたを入いれるのではないけれども、可笑をかしな事ことには、ピーが高いから、其その音おとに紛まぎれるかして「羅宇屋らうやさん。」——
人ひとが呼よんでも、肝心當人かんじんたうにんに聞きえないで、ピーピーと絶叫ぜつけうしつゝ澄すまして行く。(アヲ)の工合ぐあひが一寸此ちよつとこれに似にて居ゐる。それに舶來はくらいの何なんとか踊をどりの、金切聲きりこゑを振ふつて跳上はねあがるのにも似にて居ゐるらしい。困こまつた事は、(アヲ)ガリイリイ、其その金切聲かなきりこゑをダンスの腰こしの如ごとく振立ふりたてると、お馴染なじみの、情なさけもあれば、思おもひもあるあの、カタ、サセ、スソ、サセ、カタサセスソサセの可憐かれんなのが、呆あきれるのか、怯おびえるのか、血ちの道みちを起おこすのか、暫時ざんじびつたりと黙だまる事ことである。鷺娘ささむすめは鷺ささに成なる。上手じやうずが踊をどれば、潮來出島いたこでじまもしをらしいのに、青松蟲あまつむしなどは騒々さう／＼しい。いや、蟲むしの知しつた事ことではない、借家しゃくやが狭せまいのであらう。

【完】